

2018 実習前期レポート

前期の日本語教育実習を通して、初めて外国人学生の前に立ち、英語の使えない中で日本語の授業を行うことから多くの困難と教えることの難しさ、またそれを超えることのできた喜びと達成感を感じました。今それを振り返ってみると少しですが成長した部分を感じました。そこで今までの授業の DVD を見て私が自らの変容を感じた部分を 3 つの観点、言動、雰囲気、板書整理に分けて分析していきたいと思います。

1. 言動

初めのころは頭の中に授業の流れが入っていないことと恥ずかしさから下にある教科書や教材にずっと目を向けていて、指名するときだけ顔を上げるといった行動が多かったです。またその時も発言している学生の顔を見ておらずに黒板や自分の持っている教材ばかりに目がいていました。そのため学生ときちんとしたアイコンタクトが取れておらず学生の行動へのフィードバックが十分に行えなかったり、発言を促しているが私が学生を見ておらずに教材を見ていたので指示が通らなかったりすることが初めのころの授業では多かったと感じました。また、表情が硬く笑顔が少ないことと自信の無さから声が小さくはっきりしていないことが多かったです。しかし授業が半分を過ぎたころから変化が見え始めました。下を向く時間が短くなり、ロールプレイのときは体がしっかりと前を向き学生全員とアイコンタクトをするよう意識して目を合わせるようになっていました。またうなずきも大きな動作に代わり、声も聞こえやすい大きさになり、「好き・嫌い」を教えているときは声色や表情を変え「好き・嫌い」を分かりやすいように教えることもできていました。これは授業に対して慣れてきたことと授業の流れを頭の中に入れてから望むようにした結果次に何をすればよいのか下の教案を見ずともわかり、その分学生を気にかけて適切なフィードバックを与えることができ、また余裕があるため声が大きくなり表情が柔らかくなったのだと思います。しかしまだ単語の導入時にイラストを出す際、出し方が常に一定で面白みがないことは変わっていなかったため、後期の実習の際にはテンポを速くするなど変化を加えることができるようにしたいです。

2. 雰囲気

雰囲気とはクラスの雰囲気作りのことです。初めての授業ではすごく緊張していたためその緊張が学生にも伝わり、楽しい雰囲気ではなかったと分析しています。また声が小さかったため聞こえづらい場面が多かったと思います。他にも一緒に授業する学生教師との打ち合わせがうまくいっていないときは場面が変わるときに変な時間が空いてしまうことが多くありました。これらのことは学生の理解に支障をきたして学習意欲が低下や集中力が切れてしまうことにつながり、学生は授業がつまらないと感じていたため

はないかと分析しました。だんだん私の緊張がなくなり笑顔が増え、声が大きくなってくると学生と目が合う回数が増えていきました。打ち合わせも丁寧に行い黒板を使った練習を行ったりしました。すると授業の中の変な空き時間が少なくなりスムーズに次の場面へ移ることができ学生の興味を引き付けたまま授業を続けることができました。この体験を通して自分が変わると周りが変わる、自分が変わらないと周りは変わらないと学びました。いい雰囲気を作りたいのならば、自分が笑顔でよい雰囲気を出していることが大切だと感じました。

3. 板書整理

板書整理では、初めころは導入した絵カードや文字カードを分類することなく出した順に黒板に貼っていました。また貼り付けた教材をそのまま外すことがなく黒板には多くの教材が乱雑に貼られているという状況だったと DVD を通して確認しました。それから文字カードと模造紙に書いてあるローマ字が小さく見えづらいと思える場面も多かったと思います。授業後の反省を通してだんだん変わっていきました。まず私は文字に注意して教材を作るようになりました。大きさに気を付け、ひらがなの位置とローマ字の位置に気を付け、また 2 人登場するときは文字の色を変えるなど学生の立場で見やすさを考えられるようになりました。その結果文字が小さいため黒板を学生に近づける行動が少なくなっていました。次に種類別に貼るように気を付けました。すると見やすいという効果と私自身カードを探す時間が短縮され、カードを使って発言する授業がやりやすくなったと感じました。教材を取り外すタイミングはまだ苦手ですが、授業を重ねるごとに学生の様子を見ながら外してみたりする中で少しわかるようになってきました。後期もこの点に注意しながら黒板整理を意識して授業を進めたいと思います。

これらの 3 つの観点を分析することで、私の苦手な部分と得意な部分を再認識することができたと感じました。この結果と今回の日本語教育実習を通して、私は自分が教師として学生に教える立場になったとき、目標としてその場を臨機応変に対応し、学生が学びたいと思えるような環境を作ることができる教師になりたいという意識が生まれました。臨機応変に対応することは慣れという部分もあると思いますが、普段からできることとしては、対応力の求められるまとめ役に授業で挑戦してみることやアルバイト先でのお客様への対応の仕方などがあると思われます。学びの環境作りは大学での先生方の授業を分析してみることで学べることもあると思いました。このようなことを普段から実行して身に付けていくことで対応力と環境作りが身に付くのではないかと考えました。後期の日本語教育実習では 3 つの観点からの学びと自分の理想とする臨機応変な対応、学びの環境作りを気にかけてながら望み、良い授業が行えるように頑張っていきたいと思います。